

## 栗原教授の御仕事について

川 端 香 男 里

栗原教授は、東大露文科の創始者であられた木村彰一先生のスラヴ文献学 (die Slavische Philologie) の伝統の最も正統的な継承者であると言って過言ではありません。古代教会スラヴ語、中世ロシア語、現代ロシア語の研究を中核とし、ポーランド語、セルビア・クロアチア語の造詣を支えとするこの分野での研究の独創性は、万人我等しく認めるところであります。これにロシアの民衆文化・口承文芸を中心とするスラヴ口承文芸の比較研究という栗原教授の独壇場とも言うべき分野が加わります。

栗原教授の研究の特質は、具体的実質的ということでありましょう。私のような文学畑の人間から見ると、語学専門の方々のお仕事はえてして「形式的」でありすぎるように思えることがあり、それはそうかも知れないが一体そこにどういう意味があるのかと首をひねることもあります。これに対し栗原教授は、自分の仕事を始める前提として常にそれまでの学問業績の critical survey をすることから始められています。書かれる論文の意味、この領域でのこの論文の位置付けが読む者にとって一目瞭然なのです。教授がまだ大学院の学生であったころに書かれた処女論文「スラヴ語家畜名義考」は、語源学・意味論の分野での仕事であると同時に家畜文化史とも深く係わっていて、いかにも栗原教授らしい懐の深さというものをすでに感じさせます。

語学関係の論文の中心は、ロシア語動詞の文法範疇の理論的研究ではありますが、いわゆる school grammar とはちがう、ロシア語の実態に即した、現実の形態に忠実な文法記述が一貫してなされています。「誤用の文法」とか *dativus ethicus* という普遍的概念のロシア文法への適用は見事であり、これらの論文が発表された時、私はまだ駆け出しのロシア学徒でありましたが、感激して読んだ記憶があります。

スラヴ民俗学・スラヴ言語文化論関係の著書、論文は、まさに *Magnum opus* と言うべきものであって、あらためてコメントすべき言葉はありません。これからもこの分野でのお仕事はつぎつぎと出てくることでありましょう。文学の面でも素晴らしい仕事は沢山なされていて、翻訳でも栗原教授ならではのというお仕事はいくつもあります。

しかし、栗原教授が東大に残された最大の業績は、教育の仕事であり、後継者の育成ということでもあります。課程博士号をとられた金田一、三谷、福田（小倉）各氏がいずれも教授の薫陶のもとに育ったということが、このことをよく示しています。木村先生が創始された北大露文科にロシア言語文化論講座がつくられたということがあって、他に求められない人材として北大から懇望されたため、東大の任期を一年残して札幌に移られたことは、東大にとっては心残りのことでありました。木村先生が築かれたスラヴ学の一層の発展のためにとられた決断に思いいたして、私はあらためて栗原教授の学問教育にかける情熱に心をうたれました。以下、栗原教授の研究業績を掲載致しますが、これは教授自身が書かれたものであって、これ以外にも数多くのお仕事があるということをお知らせしておきます。

## 栗原成郎教授研究業績

### I. 著書

1. 『スラヴ吸血鬼伝説考』、河出書房新社。1980年4月、vii+261頁(+図版4頁)。

『<増補新版>スラヴ吸血鬼伝説考』、河出書房新社。1991年6月、viii+282頁(+図版4頁)

2. 『スラヴのことわざ』、ナウカ。1989年7月、viii+334頁。

### II. 論文

#### (a) ロシア・スラヴ語学関係

3. 「スラヴ語家畜名義考」、東京教育大学言語学教室紀要『言語学論叢』第3号、1961年3月、88-132頁。

4. 「現代ロシア語の相の文法範疇に関する若干の問題について」、『言語学論叢』第7号、1966年2月、41-61頁。

5. 「被動の意味をあらわすся動詞」、東京スラヴ学研究会『スラヴ学論集』第1号、1966年7月、16-31頁。

6. 「Zalog処理法—ロシア語動詞のvoice」、『言語学論叢』第8号、1967年8月、18-32頁。

7. 「ロシア語における誤用の文法—再帰動詞の対格支配の問題」、『言語学論叢』第9号、1968年12月、11-24頁。

8. 「ロシア語におけるdativus ethicusとその周辺」、日本ロシア文学会『ロシア語ロシア文学研究』第1号、1969年10月、71-81頁

9. 「ロシア語における人称自動詞構文対応の無人称再帰動詞構文」、『東京大学教養学部外国語科研究紀要』第21巻第3号、1974年3月、61-70頁。

10. 「ロシア語における動詞人称の置き換えについて」、『言語学論叢』第15号、61-70頁。

11. 「『蟻養い』の語学」、言語文化研究所紀要『日本語教育研究』第19号、1980年2月、1-10頁。

12. 『ロシア語動詞の統辞論的研究』、文部省科学研究費補助金助成による研究報告書、1981年3月、35頁。

13. 「ロシア語アスペクト論の諸問題」、東京大学文学部露文研究室年報『RUSISTIKA』第2号、1982年6月、28-33頁。

14. 「E.コシュミーテルのアスペクト論の軌跡」、『RUSISTIKA』第3号、1983年7月、5-13頁。

15. 「セルビア・クロアチア語」、ナウカ季刊誌『窓』、1985年12月、42-49頁。
16. 「スラヴ諸語」、森安達也編『スラヴ民族と東欧ロシア』（民族の世界史10）、山川出版社、1986年6月、116-152頁。

(b) ロシア・スラヴ言語文化論関係

17. 「セルビア民謡『ハサン・アガの妻の哀歌』について」、東大比較文學會『比較文學研究』第22号、1972年9月、48-62頁。
18. 「プーシキンの劇詩」、『プーシキン全集』第3巻、河出書房新社、1972年12月、605-625頁。
19. 「ヴラジーミル・ダーリ点描」、ナウカ季刊誌『窓』第9号、1974年5月、2-13頁。
20. 「プーシキンの回想と日記」、『プーシキン全集』第6巻、河出書房新社、1974年6月、581-592頁。
21. 「スカダル城邑建設考 — セルボ・クロアト民衆叙事詩における人柱の歌」、『ロシア・西欧・日本』（木村彰一教授還暦記念論文集）、朝日出版社、1976年2月、31-57頁。
22. 「ユーゴスラヴィアの哀しき女たち」、米川哲夫編『未来を築く女たち』（世界の女性史12）、評論社、1976年9月、231-274頁。
23. 「セルビア・クロアチア・スロヴェニア文学」、小場瀬卓三他編『世界の文学（6）19世紀後半編』、新日本出版社、1978年4月、123-128頁。
24. 「竜退治の英雄と竜身の英雄 — ロシアと南スラヴの民衆英雄叙事詩の比較研究」、東京大學文學部研究報告『語學文學・行動學論文集』、1979年3月、218-290頁。
25. 「スラヴ民族の諺 — 注解の試み（1）～（16）」、ナウカ季刊誌『窓』第36-51号、1981-1984年（著書2に収録）。
26. 「トリーズナ考」、ロシア研究書誌『ロシア手帖』第14号、1982年、37-40頁。
27. 「語りの構造と語りの精神 — アンドリッチ文学の一特質」、アンドリッチ『呪われた中庭』、恒文社、1983年9月、311-321頁。
28. 「東欧のフォークローア—妖精（ヴィーラ）伝説をめぐって」、『東欧』（世界の国シリーズ8）、講談社、1983年10月、174-177頁。
29. 「異教基層の隆起 — A.K.トルストイの初期幻想小説」、川端香男里編『ロシア神秘小説集』、国書刊行会、1984年7月、354-366頁。
30. 「イーゴリ軍記」、「プーシキン（I～II）」、川端香男里編『ロシアの言

語文化」、放送大学教育振興会、1985年12月、9-16, 25-40頁。

31. 「キエフ・ルーシの文学」、川端香男里編『ロシア文学史』、東京大学出版会、1986年3月、9-30頁。

32. 「口承文芸」、森安達也編『スラヴ民族と東欧ロシア』（民族の世界史10）、山川出版社、1986年6月、362-390頁。

33. К проблематике "Песен западных славян" А.С.Пушкина. В кн. "4 Советско-японский симпозиум по литературоведению", (Июнь 1985 г.), Москва, АН СССР, 1986, стр. 57-65.

（「プーシキンの『西スラヴ人の歌』の諸問題」、『第4回日ソ文学シンポジウム報告書』（1985年6月）、ソ連科学アカデミー、モスクワ、1986年、57-65頁。同題名で改訂テキストを東京大学文学部露文研究室年報『RUSISTIKA』第4号、1987年、122-133頁に収録）

34. Тема о змији младожењи у српскохрватској и јапанској народној књижевности. МСЦ НАУЧНИ САСТАНАК СЛАВИСТА У ВУКОВЕ ДАНЕ "Бук Караџић и његово дело у своме времену и данас", број 17/3, Београд, 1988, стр. 149-152.

（「セルビア・クロアチアおよび日本の昔話における蛇婿入り譚のテーマ」、ベオグラード大学国際スラヴィスト会議報告書『ヴーク・カラジッチとその仕事—往事と現在』、ベオグラード、1988年、149-152頁）

35. 「アンドリッチの人と文学」、イヴォ・アンドリッチ『ドリナの橋』、恒文社、1987年12月、3-26頁。

36. 「劇詩『ルサールカ』とその周辺」、法橋和彦編『プーシキン再読』、創元社、1987年12月、126-139頁。

37. 「ロシア語について」、「ロシアの民衆文化（I~IV）」、川端香男里編『ロシアの言語文化II』、放送大学教育振興会、1988年3月、17-71頁。

38. 「ヴーク・カラジッチ一人と業績（生誕200年を覚えて）」、ナウカ季刊誌『窓』第65号、1988年6月、2-12頁。

39. 「聖なるロシア—キリスト教の受容」、「遊牧民とのたたかい—『イーゴリ軍記』の世界」、川端香男里編『ロシアの言語文化I』、放送大学教育振興会、1989年4月、24-42頁。

40. 「スラヴ民衆英雄叙事詩研究序説」、東京大学文学部露文研究室年報『RUSISTIKA』第6号、1989年7月、1-55頁。

41. 「ポーランドのバシリスク伝説」、ポーランド文化誌『ポロニカ』第1号。恒文社、1990年8月、145-154頁。

42. 「『東欧の言語・民族・宗教…そして国家』、月刊『言語』第19巻第9号、

大修館書店、1990年9月、14-20頁。

43. 「ポーランドの河童伝説」、『ポロニカ』第2号、恒文社、1991年12月、181-199頁。

44. 「ことわざと生活」、柴宣弘編『もっと知りたいユーゴスラヴィア』、弘文堂、1991年12月、177-206頁。

45. 「風魔ラタヴィエツ、風女メルズィーナ」、『ポロニカ』第3号、恒文社、1992年11月、192-209頁。

### III. 辞書

46. 『博友社ロシア語辞典』（木村彰一、佐藤純一、中村喜和、桜井茂雄、森安達也と共編著）、博友社、1975年1月、1486頁。

47. 『岩波ロシア語辞典』（和久利誓一、飯田規和、新田実編、校閲・編集協力）、岩波書店、1992年6月、2293頁。

### IV 翻訳

48. クルレジャ「千と一つの死」、『近代小説集』第3集（「世界文学大系第93巻）、筑摩書房、1965年1月、412-414頁。

49. イヴォ・アンドリッチ「象牙の女」、『現代東欧幻想小説』、白水社、1971年10月、171-177頁。

50. 『エルミタージュ美術館』（「世界の美術館」25）、図版解説（北垣信行と共訳）、講談社、1969年9月、153-191頁。

51. 『トレチヤコフ美術館』（「世界の美術館」23）、図版解説（北垣信行と共訳）、講談社、1969年9月、154-181頁

52. 『クレムリン・ロシア美術館』（「世界の美術館」26）、図版解説（北垣信行と共訳）、講談社、1969年9月、155-181頁。

53. プーシキン「ボリース・ゴドゥノーフ」他劇詩6篇、『プーシキン全集』第3巻、河出書房新社、1972年12月、139-594頁。

54. プーシキン「回想」、「日記」、『プーシキン全集』第6巻、河出書房新社、1974年6月、7-115、518-560頁。

55. D.バーク、G.ファイファー『ソルジェニツィン伝』（上・下）、河出書房新社、1976年5月、（村手義治と共訳）、担当部分上巻223頁。

56. ヴーク・カラジッチ篇『ユーゴスラヴィアの民話（I）』（田中一生と共訳）、恒文社、1980年7月、担当部分69-284頁。

57. イヴォ・アンドリッチ『呪われた中庭』、恒文社、1983年9月、329頁。

58. A.K.トルストイ「吸血鬼」、「吸血鬼の家族」川端香男里編『ロシア神秘

小説集』、国書刊行会、1984年7月、担当部分9-157頁。

59. アントーニイ・ポゴレーリスキ「モスクワの魔女と黒猫」、富士川義之編訳『猫物語』、白水社、1992年3月、担当部分 5-43 頁。

60. アーロン・グレーヴィッチ『中世文化のカテゴリー』（川端香男里と共訳）、岩波書店、1992年10月、担当部分 227-461 頁。

## V. その他

### (a) 研究報告要旨

61. 「古代教会スラヴ語の形態論における-y<sub>2</sub>, -i<sub>2</sub>, -ě<sub>2</sub>について — 共時的分析と記述への試みの一段階として」、日本言語学会『言語研究』第46号、1964年11月、75-76頁。

62. 「南スラヴと西欧」、『スラヴ世界と「西欧」』、文部省科学研究費研究成果報告書（米川哲夫編）、1981年3月、60-62頁。

63. 「ロシア=セルビア文学交流」、『ソ連の隣国関係の比較研究』（スラヴ研究センター研究報告シリーズNo.8）、北海道大学スラヴ研究センター、1982年9月、77-81頁。

64. 「セルビア・クロアチア語におけるバルカニズム」、『バルカン諸言語における言語現象の総合的研究』、文部省科学研究費研究成果報告書（佐藤純一編）、1983年3月、17-19頁。

65. 「ヴァーク・カラジッチとロシア」、『スラヴ文化の精華』（スラヴ研究センター研究報告シリーズNo.18）、北海道大学スラヴ研究センター、1986年3月、6-10頁。

66. 「ロシアの諺に見るロシアのイメージ」、『社会主義圏における改革と変動III — ソ連を中心とする比較研究』（スラヴ研究センター研究報告シリーズNo.34）、北海道大学スラヴ研究センター、1991年4月、36-41頁。

### (b) 事典項目（大項目のみ）

67. 「ポーランドの文学」、「チェコスロヴァキアの文学」、「ユーゴスラビアの文学」、『現代教養百科事典』第9巻（文学）、暁教育図書、1968年4月、173-179, 181-182頁。

68. 「ロシア語」、『大日本百科事典「ジャポニカ」』第18巻、小学館、1971年9月、573-575頁。

69. 「ユーゴスラビア文学」、『ブリタニカ国際大百科事典』第19巻、1975年7月、687-689頁。

70. 「スラヴ人」、『平凡社大百科事典』第8巻、平凡社、1985年5月、198-199頁。
71. 「ロシア語」、『日本大百科全書』第24巻、小学館、1988年11月、547-549頁。
72. 「教会スラヴ語」、『言語学大辞典 世界言語編』上、三省堂、1988年11月、547-549頁。
73. 「セルビア・クロアチア語」、『言語学大辞典 世界言語編』上、三省堂、1989年9月、474-477頁。
74. 「ユーゴスラヴィア文学」、『新潮世界文学辞典』、新潮社、1990年4月、1449-1450頁。

(c) 小論

75. 「ロシア語を読みましよう」、『現代ロシア語』、現代ロシア語社、1966年4月～1967年3月。
76. 「ロシア語のはなし(1)～(12)」、NHKラジオテキスト『NHKロシア語入門』、1968年4月～1969年3月；「ロシア語の話(4)(5)(6)」、『NHKロシア語入門』、1970年7月～9月。
77. 「アンドリッチと女性」、『ノーベル文学賞全集』13・月報17、主婦の友社、1972年2月、5-6頁。
78. 「喪服の女たち—ボスニア奇聞」、『ばれるが』第269号、評論社、1974年7月、47頁。
79. 「世界の文学—二つの大戦の間—ユーゴスラヴィア」、『学生新聞』、1977年12月28日。
80. 「贖ドミートリイの謎」、『「メリメ全集」第5巻月報』、河出書房新社、1978年1月、1-3頁。
81. 「ダーリ『現用大ロシア語詳解辞典』全4巻」、『ロシア語の辞書』、ナウカ、1980年3月、16-17頁。
82. 「ドイツ前期ロマン主義とスラヴ圏のロマン主義」、『「ドイツ・ロマン派全集」第6巻月報』、国書刊行会、1983年9月、5-8頁。
83. 「ロシア国民文学の成立—プーシキン没後150年を前に」、『聖教新聞』、1986年11月29日、7面。
84. 「原始の悲嘆—『ボスニア物語』」、アンドリッチ『ボスニア物語』、恒文社、1988年12月、379-381頁。
85. 「ミオドラグ・ブラートビッチ」、『京都新聞』、1990年5月11日、17面。



(d)書評

86. H.クラエ・下宮忠雄訳『言語と先史時代』、『言語生活』第226号、筑摩書房、1970年7月、58-59頁。
87. B.V.Bratus. The Formation and Expressive Use of Diminutives (Studies in the Modern Russian Language 6), Cambridge University Press, 1969, viii+70 pp. 日本ロシア文学会『ロシア語ロシア文学研究』第2号、1970年10月、109-112頁。
88. 山口巖「中世ロシア文法史」、『ロシア語ロシア文学研究』第24号、1992年10月、88-95頁。

(e)随想

89. 「語学と政治」、『教養学部報』（東京大学教養学部）第191号、1972年11月17日。
90. 「語学の天才レオ・ウィーナー」、『東京大学新聞』第938号、1972年11月13日。
91. 「知と愛の師 — 関根正雄教授」、『関根正雄著作集』第14巻月報10、新地書房、1981年9月、1-3頁。
92. 「外国語辞典を読む — 露語辞典」、『東京大学新聞』第1393号、1983年10月18日。
93. 「ヴェーク詣で」、『学内広報』No.703、東京大学広報委員会、1986年1月13日、8-9頁。
94. 「カリユブソーの島」、『歴史と地理』第384号、山川出版社、1987年8月、38-39頁。
95. 「モンテネグロの小石」、『言語』Vol.17.No.5、大修館書店、1988年5月、6-7頁。
96. 「サライエヴォ」、『三省堂ぶっくれっと』No.92、三省堂、1991年5月、40-47頁。